



KEIO SFC REVIEW

[特集] SFCの担い手たち

[特集] 入学試験の改革に込められたSFCのメッセージ



[ようこそ、新任教授] 宮代康丈 / 宮垣元

[おとなりの研究会] 小暮厚之 / 添田英津子

[sfcism] 能城政隆



[When I was young] 野村亨

No.

56



Table of Contents

特集

S F Cの担い手たち	02
[インタビュー] 活動紹介	
A&T / AVコンサルタント / 映像工房 /	
学生ガイド / T-able / 花火師会 / madcap	05
[鼎談] S F Cのメディアを考える	
KEIO SFC REVIEW × SFC CLIP × SFCnow!	12
入学試験の改革に込められたS F Cのメッセージ	16
試験教科・科目の部分的変更	17
「外国語」における変更	18
「情報」の追加	20

連載

ようこそ、新任教授	22
宮代 康丈 総合政策学部准教授	
宮垣 元 総合政策学部教授	
おとなりの研究会	28
小暮 厚之 総合政策学部教授	
添田 英津子 看護医療学部専任講師	
sfcism	32
能城 政隆 環境情報学部 2009 年度卒業生	
When I was young	34
野村 亨 総合政策学部教授	
Abstract SFC REVIEW 56	38
From Editor	40



！ キャンパスの学生自治

SFCにはいわゆるサークルや体育會に属する〇〇部だけではなく、大学から委託をうけて活動する団体や、大学のためになる活動をする団体など、「キャンパスライフの担い手」と呼べるような学生団体が数多く存在する。今号では、その「キャンパスライフの担い手」のうち、七つの団体に話を聞いた。

また、「キャンパスライフの担い手」の中でも、学内の情報発信に特化している二団体と KEIO SFC REVIEW の三団体で集い、それぞれの活動の意義や意味について議論を交わした様子もお届けする。



p12

KEIO SFC REVIEW × SFC CLIP × SFCnow! SFCのメディアを考える

今年七月末、KEIO SFC REVIEW、SFC CLIP、SFCnow!の三者による鼎談を開催した。SFCで情報発信はいかにあるべきか、また学生としてそれとどのように向き合うべきなのか。当日の議論の様子をお送りする。



特集1



SFCの担い手たち



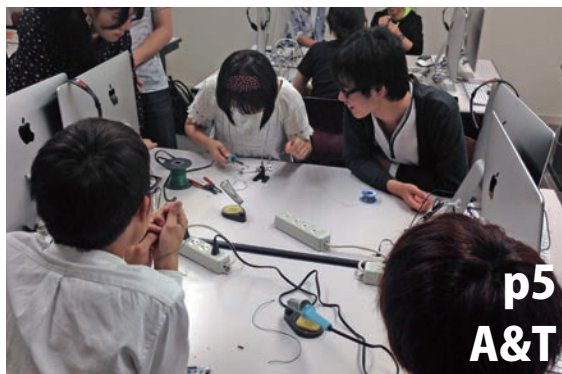
p05

活動紹介

SFCの「キャンパスライフの担い手」とはどのような人たちなのだろうか。A&T、AVコンサルタント、映像工房、学生ガイド、T-table、花火師会、madcapの七団体に彼らの理念を聞いた。



活動紹介 INDEX



ものづくりの楽しさを体験

PROFILE：活動形態 サークル活動
活動人数 約30人

NO.1

A&T

—活動

主にSFCの新生を対象に、プログラミングと工作を組み合わせたメディアアート作品を、企画、制作、そして展示するところまで体験できるワークショップを運営している団体です。四月から一学期間かけて作品を制作し、六月の「アート&テクノロジー東北」というコンテストで発表することをゴールにしています。今年は十六人の新生がワークショップに参加し、四人で一チームの合計四チームが活動していました。

—特徴

前提知識を一切必要としないところ。技術や知識を持っていないと、逆にそれに発想が縛られてしまうことがある。むしろ入ってきた一年生が何も知らない状態であるということがA&Tの強みなのかなと思います。制作にあたって、一年生に足りない技術や知識は、過去の参加者を中心とした上級生がサ

ポートしています。

SFCには授業がたくさんあり、履修選抜などの制約もあるため、特に一年生の頃は授業をとってはみたものの、自分がやりたかったことは違う、というミスマッチが起こりやすい。A&Tの場合、考えて作って展示するという一通りの過程をぎゅつと凝縮して体験することができると、やりたいことが分からないう一年生にとって自分が興味あること、得意なことを見つける良い機会なのではないかと思えます。一方で、SFCのカリキュラムは必修の授業が少ないので空き時間が多く、活動に長い時間を費やすことができます。短期間で集中的に作品をつくりあげることが求められるので、SFCの自由な制度に助けられている部分はとても大きいです。

—今後

活動の中で、学内のものづくりの環境が不十分であると感じることが多々ありました。汚れ作業や半田付けができる場所はとても限られてい

るのです。ものづくり工房やファブスペースなどと連携し、SFCのものづくりの環境をもっと整えていきたいと考えています。

必ずしもワークショップを体験した人たちが全員ものづくり系の研究会(ゼミ)に入るわけではありませんが、しかし、活動をはじめて六年が経ち、さまざまな分野に散らばった人たちの間で、ものづくりを軸としたゆるやかなつながりが生まれてきました。これからも、ワークショップの運営を主体に置きつつ、SFCの中でのものづくりのコミュニティを広げていけたらいいと思っています。



代表 環境情報学部3年
浅野 義弘 (あさの・よしひろ)

AV機材の貸し出し、管理を行う

PROFILE：活動形態 メディアセンター直属の団体
活動人数 約30人

NO.2

AVコンサルタント

—活動

SFCでは、メディアアセンター、つまり図書館でビデオカメラなどの撮影機材の貸し出しをしています。さらに、3Dプリンタやデジタル刺繍マシンなど、ものづくりの機材（ファブ機材）を学生が自由に使えるファブスペースという空間もあり、そちらの管理も担当しています。また、これらの機材に関する質問も受け付けています。

他にも、不定期でAV機材やファブ機材に関するワークショップを企画し、実施しています。このワークショップはメンバーの学生がそれぞれの得意分野を活かすわけです。その他にも、こんなワークショップをしてほしいという要望があれば、それに応じて開催することもあります。

—特徴

ファブスペースがメディアアセンターにあるというのは、全国でも初めての事例です。さらに、その管

理を学生が行っているのはまさにユニークではないでしょうか。先日、徳島大学の方が見学にいらして、その方も学生がファブ機材の管理を行っていることに驚かれたようでした。

ファブスペース開設当初は、みなさんがどういうふうにするのか全く予想が付きませんでした。そこで、運営担当の学生間で話し合い、「とにかく使ってもらって、おもしろさを分かってもらう」という方針を決めて、運営をしてきました。その甲斐あってか、現在は利用者がかなり増えているようです。最終的にはカメラを借りるような気軽さでファブ機材を利用してもらうことが目標です。

—やりがい

やっぱり、相談に来た人と一緒にやって何かをすることがおもしろい。コンサルタントの仕事というのは先生と生徒みたいに、「ここをこうすればできる」と教えることではなくて、相談に来た人と一緒に悩み

ながら試行錯誤していくことです。その過程で、我々も知らなかったことに気づかされたりする。そういう教えているような教わっているような、相互にいい影響を及ぼすようなコミュニケーションができたとき、AVコンサルタントをやっているとよかったです。



代表 環境情報学部3年
高橋 鴻介（たかはし・こうすけ）

SFCの音響を支える

PROFILE：活動形態 福利厚生団体
活動人数 約50人

NO.3

音像工房

—活動—

私たちは大学から委託を受け、福利厚生団体として大きく分けて三つの活動をしています。θ館（学内最大の講堂）の管理やサポート、学園祭時にスピーカーなどの機材の貸し出し、そしてレディオ湘南という地方のラジオ局でのFM放送の三つです。FM放送は、第一週と第二週土曜日の、月に二回放送しています。企画からすべて自分たちで運営していて、だいたい一、二週間前から放送にむけて準備をしています。

メンバーは全体で五十人くらいです。三つの活動ごとにマネージャーとサブマネージャーを中心にグループを形成していますが、それぞれ独立することなくお互いに助け合いながら、垣根のない雰囲気です。

—特徴—

学校側から委託されて設立された団体ですが、運営はほとんど学生が行っています。大学事務室とのやり

とりは年に数回の収支報告くらいですね。

サークルと福利厚生団体の大きな違いというのは、遊びではなく仕事としてはじめを持って取り組んでいるところだと思います。機材を貸す際にはお金をもらっていますし、FM放送は学外へも発信していますから、責任は重大です。ただ、みんながみんな最初から専門知識や技術を持っているわけではありません。学園祭やイベントのサポートなどを通じて、身に付けていく人も多いです。

—やりがい—

僕は去年までθ館で機材のサポートをしていました。θ館が建てられたのが二十年前で、機材の入れ替えがあったのは十年前なので、最近ではθ館でさまざまな不具合が起きるようになりました。なので、私たちがサポートしないと授業が進まないこともあるのですが、その度に走り回って機材を調整することが楽しいんです。難しい問題が起こって、それを解決した時の達成感にやりがい

を感じます。活動の大半が裏方の仕事ですが、対外的なやりとりをしていくなかで社会勉強になったり、機材に詳しくなれたり、いろいろな団体と関わりを持てたりなど、たくさんの方が得られると思うています。



代表 環境情報学部2年
田川 慶樹（たがわ・よしき）

受験生へのSFCの顔

PROFILE：活動形態 アドミッションズ・オフィス事務室直属の団体
活動人数 約40人

NO.4

学生ガイド

—活動

「学生ガイド」は、大学事務(学事)のアドミッションズ・オフィスという大学の広報や入試を担当している部署の方々と連携し、大学の広報を手伝っている団体です。具体的には、大学が開催しているオープンキャンパスや説明会、模擬講義などを補助しつつ、現役のSFC生として受験生とその保護者の質問に答えたり、相談に乗ったりしています。なかでも、七夕祭と並行して開催している予約制の学部説明会と、SFC自体のオープンキャンパスには力を入れています。

る局で、最後のツアー局は七夕祭やオープンキャンパス中に行う、解説を交えながら三十分ほどかけてSFCを一周するツアーを主催しています。

—特徴

他のキャンパスにも似たような活動を展開している団体はあるようなのですが、あくまでも福利厚生や学校を盛り上げる活動の一環として受験生向けの説明会に取り組みしており、「学生ガイド」のように、学事と連携して公式に学校の広報やオープンキャンパスの運営をする組織、というのはSFC独自のものだと思います。やはり、SFCは他のキャンパスと比較すると、どういうことしているのか、受験生にとっては一番分かりにくいと思うんですね。ですので、「学生ガイド」はSFCの多様な学生、空気をそのまま実感してもらおうための、SFCに固有の組織だと思っています。

—やりがい

オープンキャンパスを開催した後、参加してくれた受験生たちが、すぐおもしろかったです、来年SFCに入れるようにがんばります、と言ってくれることがあるんですが、その一言さえあればやりがいは十分ですね。僕自身、受験生のときに学生ガイドの人がかつこよくプレゼンテーションをする姿に憧れてSFCに入った、という経緯があるので、受験生たちが受験を考える上で僕たちの活動が少しでも参考になればと思っています。



代表 総合政策学部3年
菅原 崇博(すがわら・たかひろ)

高校生にSFCのリアルを伝える

PROFILE：活動形態 サークル活動
活動人数 5人

NO.5

T-table

—活動

SFCで、あるいはSFCを拠点に活動している研究会（ゼミ）と学生団体と連携、SFCの学園祭（七夕祭、秋祭）に来た人たちに彼らの活動内容を紹介するためのブースを作っています。最初は秋祭実行委員会の企画の一つとしてはじまりました。去年の七夕祭の頃から学生団体として秋祭実行委員会から独立し、今年の春に公認団体になりました。

T-tableという名前には「三つのTができる場所」という意味を込めています。三つのTとは talk・trade・try で、talk は内に秘めていたことを話すという意味。trade は情報や要求を交換するという意味。try は talk や trade できなかったチャンスや繋がりをうまく使って、新しいことに挑戦し続けていくという意味です。その三つのTができる (able) 企画になるように、との思いから、T-table と名付けました。

—特徴

外部の方、特に高校生にとつてSFCを知ることのできる場であることです。学園祭に来る高校生は、SFCがどういふところかをよくは知らない。さまざまな学生の活動を見せることで、分野の多様性というSFCの一番の魅力を、高校生に紹介できる点が特徴的です。

また、在学生に向けても良い機会になっています。研究している分野が違ふと、交流が少ないですよね。研究発表の場となるORFはどちらかというと外部向けなので、T-table が学内向けの研究発信の場となることを目標としています。他の大学ではやっていることが一つの分野に特化しているので、来た人たちに対して情報を与えるだけの一方通行の関係に留まると思うのですが、SFCの場合には、異なるさまざまな分野があるので、より多様な関係が営めるのではないのでしょうか。

—やりがい

初めて会った人とブースで直接しゃべって、その後にも繋がりが長く続いていくことが楽しいです。T-table に所属している多様な学生や、出展団体の方々と知り合えるのもこの活動ならではです。活動を通じて人脈が広がっていくことが T-table としての最大の強みであり、やりがいです。また僕らが高校生と関わることは、大学への貢献にもなると思うので、これからもそういった繋がりを大事にしていきたいです。



代表 総合政策学部2年
間瀬 海太（ませ・うみた）

笑顔の大輪を夜空に咲かせる

PROFILE：活動形態 サークル活動
活動人数 51人

NO.6

花火師会

—活動

主な活動として、年に二回、七夕祭と秋祭の最後に花火を揚げています。学園祭の三ヶ月前ぐらいから、神奈川県庁の環境保全課などの行政の方と、警察と消防の方とで話し合いを重ね、安全に打ち揚げるために協力していただいています。花火を揚げるときの音楽や、使う花火の種類などのアイデアを出すのはもちろん学生です。もともと、花火の種類に関しては、花火の玉を作っている花火業者と話し合って決定していきます。花火業者の方は、学園祭当日も花火を打ち揚げる準備などを学生と一緒にやってくださっています。現在団体メンバーの半数は花火師免許を持っています。きちんと花火を扱う技能を身につけた上で作業を行わなければならないので、できるだけ多くのメンバーに免許を持ってもらいたいです。

—特徴

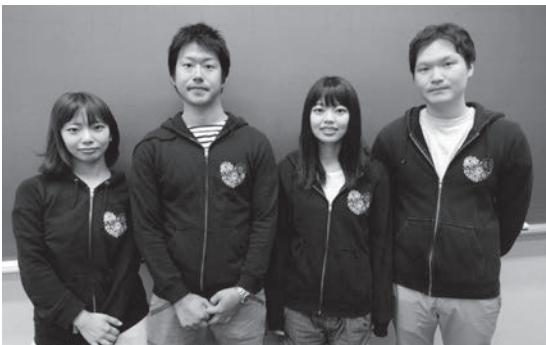
最初は七夕祭実行委員の中に花火

を揚げるセクションがありました。当時は大学事務室の方々と一緒に活動していましたが、今は企画から当日の打ち揚げまでほとんどを私たちが行っています。学園祭で花火を揚げる大学は少なくありませんが、学生が中心となっていて行っているのは私たちだけです。それは、SFCには学内のことは学生がやろうという雰囲気があるからだと思っています。

—やりがい

僕個人の話になりますが、僕は花火師会があるからSFCに入ろうと思っていました。元々花火を見ることがとても好きだったし、学生が花火を揚げるのが魅力的だと思っていたんです。花火師会の中には、作業が好きな人や、作業は得意でなくても花火鑑賞が好きな人や、演出を考えるのが好きな人などさまざまな人がいます。そういう、一見バラバラな人たちが一緒になって花火という一つのエンターテイメントを作っ

て、それを見た人たちに喜んでもらえることが一番嬉しいです。花火の玉は僕たちが作っているわけではないのですが、花火が揚がったとき、花火を見た人たちの歓声を聞いたときの達成感は忘れられません。



(左から) 環境情報学部 3年 今泉 茉莉花 (いまいずみ・まりか)
環境情報学部 3年 針谷 将幸 (はりがや・まさゆき)
環境情報学部 2年 上野 綾華 (うえの・あやか)
環境情報学部 2年 寺岡 雅史 (てらおか・まさし)

生き生きとしたSFC生を紹介する

PROFILE：活動形態 自主活動
活動人数 約10人

NO.7

madcap

—活動

madcapは私たちの団体名であり、私たちが発行している雑誌の名称でもあります。活動内容は『madcap』を発行することです。春学期の最初、七夕祭、秋祭など、学内のイベントに合わせて年に数回発行しています。あくまでもKEIO SFC REVIEWやSFC CLIPのようなメディア媒体とは趣が異なり、雑誌の内容は主にSFC生の紹介です。文章だけではなく、できる限り写真を使ってSFCの雰囲気伝えることにこだわっています。写真を通して、こんな人がいるんだって知ってもらったり、その人を通じてSFCについて知ってもらいたいと思って雑誌を作っています。

—特徴

私たちの団体の一番の特徴は、サークルではないこと、だと思えます。SFCには非公認団体、公認団体など、さまざまなサークルの区分があるのですが、madcapはそのどれでもない、ただの有志の集まりです。サークルになるとさまざまな特

典があるのですが、その一方、さまざまな義務が課されることになりま。私たちはあくまでも写真を撮ったり、冊子をつくったりするのが好きだから自主的に活動しているの。より柔軟に活動できるよう、大学にもサークルとしての登録はしていません。実際の活動でも、誰かが代表となつてみんなを引っ張る、というよりはみんな仲良く、誰かが忙しいときはその分も他の人ががんばりつつ、和気あいあいと活動しています。

—やりがい

『madcap』には決まった形式や慣習がほとんどなく、世代ごとに内容やレイアウトを自由に決めているんです。たとえば、『madcap』を創刊した先輩たちは写真が好きだったので、掲載していたのはスナップ写真のみで、冊子のサイズも現在使っているB6ではなく、スナップ写真に合わせてB7を使っています。私たちの世代では、『madcap』に載っている人たちが普段どういう研究会やサークルにいて、どうい活動をしているのか、ということ

インタビューするなど、被写体の人にフォーカスするような内容を心がけてきました。そうやって自分たちのこだわりを毎号強く込めるからこそ、私たち自身が納得できるところまで作りこんだ冊子が印刷・製本されて、届くときの感動はひとしおですね。また、さつきも言ったとおり私たちは情報誌よりも雑誌を目指しているの。『madcap』を読んでもくれた人が、かわいい、と言ってくれるときもすごいうれしいですね。その言葉を聞くと、がんばって作ってよかったなと思います。



madcap (左) 環境情報学部3年 小島 汐里 (こじま・しおり)
(右) 環境情報学部3年 宮地 茉萌 (みやじ・まほ)

メディアを考える

SFCnow!

鼎談の狙い

藤吉

現在、SFCのさまざまな場所です。さまざまなタイミングで情報が発信されています。その内容もさまざまなら、発信者もさまざまです。ところが、お互いに連携を取っていないので、それぞれの立場がはつきりはしていません。そこで、私たちメディア同士がどのような関係にあるのか、今後どのような情報を発信していくことが必要とされているのか、みんながどのような情報が必要としているのか、また、僕たちがSFC生であれば知っておいた方がいいと思っていることを話したいと思っています。

自己紹介

藤吉

KEIO SFC REVIEW(以下REVIEW)編集長の藤吉です。三、四ヶ月に一度、年間三号ほど学内の情報を集めた雑誌、『KEIO SFC REVIEW』を発行しています。SFCはインターネットで調べても、実際に何をして

いるのかが分かりづらいですよね。それはSFCが、従来の縦割な学問体系ではなく、いろいろな分野や人が繋がっているネットワーク状の学問体系を築いているからだと思えます。でも、それは誰もが普段から感じることができるわけではないと思っています。REVIEWはそういった学問分野や人の繋がりのあり方を照らし出す雑誌になりたいと思っています。

坂井

僕はSFC CLIP (以下CLIP)の編集長です。CLIPは、「SFCの今を伝えるメディア」として、毎週金曜日にCLIPのウェブサイト(sfcclip.net)上でSFCで起きた出来事やニュースを配信しています。ウェブサイトに毎月五万〜十万のアクセスをいただいています。現在はサークルとして運営していますが、元々はある研究会のプロジェクトとして数人の学生がはじめた組織でした。大きく三つの理念が当初から掲げられています。一つ目は、キャンパスのさまざまな情報を集約して分かりやすく学生に届ける

こと。二つ目は、キャンパス内の人を繋ぎ、学生が主体的に行動することを促すこと。三つ目は、受験生や卒業生、あるいはSFCに関心のある社会人など、SFCの外部の人にもキャンパスの最新情報を届けていくことです。CLIPの記事がきっかけになって、SFCの内外でコラボレーションが生まれ、新しい活動が立ち上がるといいなと思っています。

土肥

SFCnow! (以下NOW) 管理人の土肥です。Facebook上やSFCnow!というグループを作り、そこでSFCの情報やSFC生の活動情報などを発信しています。現在、グループには千二百人近くが参加していて、教職員や学生はもちろん、SFCの卒業生の方々も入っています。二〇一三年の二月にはじめてから、もうすぐ一年四ヶ月(鼎談開催時)になります。SFCにはいろいろな授業がありますし、有名な先生や卒業生がたくさんいます。今在学している学生もいろいろな分野の人たちがいるので、そういう人たちの活動が

SFCの

KEIO SFC REVIEW × SFC CLIP ×

もつと可視化されてお互いに繋がれば、よりおもしろいキャンパスになるんじゃないかなと思っています。

お互いの位置づけ

藤吉

REVIEWは、SFCの専任教員全員が所属している湘南藤沢学会の発行媒体なので、僕たちの報道はオフィシャルな性格を持っています。学生が自主的に活動しているCLIPはSFCに関するネガティブなニュースも記事にしていますよね。我々は両論併記でなければそうはできないと僕は思っています。またニュース以外にも、CLIPでは所属記者によるコラムも配信していますよね。一方、NOWは土肥さんの運営下でグループ内の人たちが情報を提供している形をとっていて、運営者の土肥さん自身がコンテンツを作るといよりは、外部のリンクを紹介することがほとんどですよ。CLIPやREVIEWのように、既にまとめられている情報をさらにまとめて紹介する、ということもやっています。そういう意味で、NOWは

メディアをまとめるキュレーターとなっていると 생각합니다。

土肥

私が一年生の頃、CLIPの記事を見て感じていたのは、SFCの、多種多様な人がいるという特徴をあまり活かせてないということでした。いろいろな人がいろいろな活動をしているのに、お互いがそのことを知らない。学生の間を繋ぐことで学生の多様性を活かしたい、ということもNOWをはじめたきっかけの一つです。ただ、私は情報を集めることはできますけど、REVIEWやCLIPのように時間をかけて情報に深みを出したり、内容を深く推敲することはできていません。

藤吉

CLIPはウェブ掲載なので、REVIEWのようにページ数や文字数などの制限がなく、いろいろな種類の記事を書きな長さで書けるので、とてもおいしい立場にいますよね(笑)。ただ、最近のCLIPは問題提起型の記事が少ないですよ。昔はあえてSFCの良いところやSFCが抱えて

いる問題を表立って提起しているところに、CLIPのユニークさやCLIPが目指している学生による学内メディアの自治が体现されていたと思います。これは実はCLIPに限った話ではなく、僕たちSFCのメディアも連携をとっていませんでしたよね。SFCは確かに多様なんだけど、極端なことを言えば、その部分部分がそれぞれに自足して閉じてしまい、蛸壺化してきているのではないかと思います。

坂井

確かにCLIPはいいところ取りをしています。また、ご指摘にあった通り、確かにコラムをはじめとする学生目線の記事が減ってきているなとも感じます。お互いが問題だと思っていることを共有し、問題として提起するために、客観的なニュースだけではなく、より学生に寄り添った記事づくりを心がけたいと思います。今回初めて三つのメディアが出会って、改めて今まで情報共有ができていなかったことに気づきますね。今後うまく連携をとれば、たとえば情報や写真はもちろん、人員や

ノウハウでもお互いになにか協力できることがあると思っています。

アーカイブを次につなげる

藤吉

昔から、SFCにはとても多くの種類のメディアがありました。SFC独自のSNSや、大学が提供している履修システムを拡張したようなサービスもありました。しかし、そういったメディアが次々と消えていき、それがどのようなものだったかというアーカイブも残っていないのが現状です。実験型キャンパスであるがゆえ、いろいろなメディアやツールを実験するのがSFCらしいですが、それらが記録・保存されていないというのは、実験として成立していません。きちんとアーカイブをとっておくことで今までのような活動があり、何が新しいのかが分かります。現に、アーカイブがないために同じような活動をし、同じような経緯で終わってしまった活動がいくつもあります。

土肥

NOWはコンテンツをアーカイブできていないんですが、最近卒業生がNOWに入ってきてくれたことで、今まで現役生とは断絶されていた過去二十年間分の人的ネットワークが補充されてきました。現役生が「こういうことに挑戦したい」と投稿したときに、卒業生が「以前こういうことあつたよ」という書き込みをしてくれる。そうやって、直接コンテンツをアーカイブするのではなく、人のネットワークを通じて各個人が知っているコンテンツにアクセスするというのがNOWなりのアーカイブの仕方かなと思います。

坂井

CLIPは創設から今まで十四年間の記事のアーカイブがあります。ただ、その十四年間の情報の積み重ねが、必ずしも読者にアーカイブとして有効に利用されていないと感じています。過去にこういうことをやった先輩がいたんだ、じゃあ俺たちもこんなことがやれるんじゃない？ と思ってほしいんです。アーカイブに眠っているような過去の

の活動を、今の学生たちに超えていつてほしい。このことはCLIPの理念にも繋がると思います。

SFC生のリテラシー

藤吉

今の学生がどんな情報を知りたいのかは気になります。さつき情報集約という話があつたけれど、そもそも情報は必要とされているのかと疑問に思ったりもします。今のSFC生には、「このことはみんな知っている」とか「こういうことはみんな体験した」という共同意識がないですよ。そのような意識を獲得できるのは、今では体育ぐらいです。

土肥

個人的には、SFC生にもっと主体的になつてほしいと思います。そうすると、いろいろな有意義な情報が入ってくると思うんです。SFCって、いろいろな人がいろいろな情報を独自に公開していますよね。だから、こちらから自分が必要な情報を探していくというスタンスが重要だと思えます。ところが、掲示板

一枚にも自分の将来に関係する情報があるかもしれないのに、ほとんどの人は見すごしている。私としては、NOWにアクセスして初めて自分にとって有意義な情報を得るという状況、それを悔しがってほしいんです。そして、この情報を知らなかったら人生変わっていたな、もっと意識して情報を収集しようというふうに考え直してもらえたらいいなと思います。

坂井

ただ、どこまで大学がやるべきなのかは悩ましいですよ。大学としてはちゃんと情報を出しているんです。それでも、本当に忙しい学生って情報を探す時間をあまり取ることができない。そういうときに僕たちがメディアが求められているんだと思います。大学が出しているのに届いていない情報とみんなの橋渡しをするわけです。

藤吉

僕たちメディアが発信する情報をそのまま受け取るのではなく、土肥さんが言っているように、自分に関

連することや、自分に直接は関係ないけれどSFCの誰かがやっていることに興味を持ってほしいですね。同じキャンパスで活動しているのだから、どこかで繋がる可能性はあるし、そういうふうにならざるを得ない分野や人が今までになかったような繋がり方をするのがSFCらしい。僕たちのようなメディアは、最低限学生が必要な情報を発信するだけではなく、SFCでこんなことができるといような、SFCの可能性を示すことも今後は目指していきたいですね。



KEIO SFC REVIEW

PROFILE：活動形態 湘南藤沢学会直属の団体
活動人数 6人

藤吉 賢（ふじよし・けん）

環境情報学部4年、田中浩也研究会所属。

51号からKEIO SFC REVIEWの編集長を務める。

SFC CLIP

PROFILE：活動形態 サークル活動
活動人数 約30人

坂井 祥仁（さかい・よしひと）

総合政策学部3年、山本純一研究会所属。

2014年度からSFC CLIP編集長を務める。



SFCnow!

PROFILE：活動形態 Facebook グループ
グループ参加者 約1300人

土肥 梨恵子（どひ・りえこ）

総合政策学部3年、鈴木寛研究会所属。

2013年からSFCnow!の管理人を務める。

特集2

\\ 入学試験の改革に込められた //

SFCのメッセージ

English
Deutsch
Français



2016年度の入試より、総合政策学部と環境情報学部の一般入試が大幅に変更される。「情報」の追加、そして「外国語」におけるドイツ語とフランス語の選択肢の追加。なぜ今、入試の方式を大きく変えるのか。そこには大学の新しいあり方に関するSFC教員の期待が込められている。村井純環境情報学部長と國枝孝弘総合政策学部教授に、新しい入試方式の狙いやSFCにこれから入ってくる学生たちへのメッセージを聞いた。

解説

試験教科・科目の
部分的変更

① 「外国語」における変更

2015年度の入試は従来通り、「外国語」は英語Ⅰ、英語Ⅱ、[英語の]リーディング、[英語の]ライティングで構成される。

2016年度からは、「コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ、コミュニケーション英語Ⅲ、英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ」と、「コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション

英語Ⅱ、コミュニケーション英語Ⅲ、英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ、ドイツ語」と、「コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ、コミュニケーション英語Ⅲ、英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ、フランス語」の3つに分かれる。受験生はこの3つのいずれかを選択する形となる。

② 「情報」の追加

従来、「数学」「外国語」「数学および外国語」の3つの中から1つと「小論文」、この2つの試験を受ける必要があった。2015年度入試の「数学」はこれまで通り、数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、数学Bからの出題になる。数学Bでは「数列」・「ベクトル」に対応する問題と「数値計算とコンピューター」に対応する問題のいずれか一方を選択する形となる。

2016年度入試から、受験生は「小論文」以

外に、「数学」「外国語」「数学および外国語」「情報」の4つの中から1つを選択して試験を受けることになる。「数学」は数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、数学Bが出題範囲であることは2015年度までと変わらないが、数学Bの出題範囲が「確率分布と統計的な計測」・「数列」・「ベクトル」の3つに変更になった。その一方で、「情報」という新しい試験が設定された。

國枝教授インタビュー

「外国語」における 変更

——多言語試験が導入されるまでの経緯

私たちが今回、一般入試の「外国語」で問題の一部を英語以外の言語を選択して解答することもできるようにした理由は主に二つあります。一つ目は、受験生に向けたメッセージ。入試にはその大学がどのようなタイプの学生に入ってきてもらいたいのか、また、その大学がどのような学

生を育てたいと思っているか、というメッセージが込められています。SFCでは、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、マレー・インドネシア語、中国語、朝鮮語、アラビア語、日本語の九種類の言語を学ぶことができます。これだけ多言語に展開しているので、SFCとしてはぜひこの多言語環境を活用しながら成長していくような人に来てほしいと考えています。特に、多言語というのが重要で、英語が大切なこととは言ってもありませんが、SFCに来たなら、それ以外の外国語も学んでもらいたいです。

もうひとつは、社会へのメッセージです。入試は受験生へのメッセージでもあると同時に、SFCがどのような学生を社会に輩出しようとしているのか、SFCとして、今後どのようなことが社会で重要になっていくと考えているのか、も示しています。特に、慶應義塾のような大学が新しい取り組みをはじめると、それは少なからず社会にもインパクトを与えるのではないかと思っています。では、何を伝えたいかというところ

今の日本の高校生は大学に入るまで、ほとんど英語以外の外国語を学んでいない。数字で言うと、全体の1.4%しか第二外国語を勉強していない。これは世界的にも非常に例外的なことです。今、社会全体でグローバル化が重視されるようになってきました。外国語教育に携わる者としては、グローバルというのは多角的な視野を持つことであり、あたかも英語さえできればよい、というような今の風潮とは意味が異なります。そのような現状に対し、入試をとおして多少とも多言語環境を日本に導入したい、というのが今回の多言語入試導入に至った私たちの思いです。

——具体的なきっかけ

SFCは多言語主義・多文化共生を以前から重要視してきましたが、入試に実際に導入することにしたひとつのきっかけには、高大連携の取り組みの経験がありました。従来、高校と大学というのは一貫校でもない限り連携などないと言っても等しい

く、受験という制度によってすばつと分かれていたんです。そこで、高校と大学で連携して何かできないか、という取り組みが高大連携です。僕が知っているところだと、たとえば明治大学や獨協大学です。こうした取り組みを行っています。また、先ほど第二外国語を学んでいる高校生が1.4%いる、と言いましたが、具体的に彼らがどのようなことを考えているのか、先生方はどのような教育をされているのか、ということに以前から言語関係の教員の間では関心を持っていました。そこで、英語以外の言語も教えている高校と意見交換やディスカッションを行いました。

大多数の高校生が英語だけを勉強している中で、例外的に！英語以外にもう一言語を勉強している若者たちに実際に会ってみると、たとえ人数は少ないとはいえ、やる気を持って勉強している。日本の現状において、この貴重な高校生たちを応援したいなという気持ちがいってきます。そしてこれは私以外の教員にも共有される思いでした。さて、

SFCのメッセージ

そこで私たちができる一番インパクトのある方策は、入試を変えることだったんです。

とはいえ、今回の入試の変更はSFCの各言語セッションが行っている多言語環境推進のための方策のひとつにすぎません。今年度より適用されている、新しい学則では言語コミュニケーション科目の必修単位数が八単位になっています。大事なことは英語も含めた外国語の中から八単位です。SFCには第一外国語、第二外国語の区別はありません。これも方策のひとつです。今回の多言語入試ではフランス語とドイツ語のみが導入されることになっていますが、これは言語科目担当教員全員で相談して、今回の入試から導入できそうなのがフランス語とドイツ語だった、という経緯で決まったものです。ですから、今後はそれ以外の言語も同じように入試に導入していきたいよう、調整していきたいと考えています。

—入試導入後への期待

そもそも第二外国語を高校で学んでいる生徒の数が少ないことから、現状ではこの入試を受けて入ってくる受験生の数はそれほど多くないでしょう。ただ、彼らが入ってくると、英語だけではなく他の外国語もすでにできるわけですから、たとえば一年生のときからインテンシブ（週四コマの授業で、集中的に外国語を学習するコース）の上の方のクラスで勉強を開始できることになりますよね。英語以外の言語に秀でるのも一

つの個性であり、そんな個性をもった学生がキャンパスにいることがSFCの魅力ではないでしょうか。言語だけじゃなく、コンピュータに強い子や学外でユニークな活動に取り組んでいる子など、いろんなプロフィールやバックグラウンドを持つ学生が集まっている環境をつくる、このことがキャンパスを活性化するために重要なことであると思っています。

國枝 孝弘

(くにえだ・たかひろ)

総合政策学部教授

専門はフランス文学、フランス語教育

English
Deutsch
Français



村井学部長インタビュー

「情報」の追加

——今回、「情報」が導入された経緯

SFCは創立時から、何年か経てば、コンピュータやインターネットを前提にしたような社会が当たり前になるから、そういったことを学べる場所であろう、ということを中心に持っていました。だから、一九九〇年の開校以来、学生全員に対して情報の教育を行ってきました

た。

実は、これは元塾長である、小泉信三先生の「塾生皆泳」という理念に則ったものでもあります。今ではSFC以外の学部では体育は必修ではなくなつてしまいましたが、僕は学生だった頃、慶應の学生は一年生の夏休み直前に全員日吉のプールで50m泳がされたのです。中には泳ぎ切れない学生もいて、彼らは水泳の授業をとらされる。無事50m泳ぎ切れると、乗馬やスキー、ゴルフみたいな、水泳以外の体育の授業を履修できるように。つまり、最終的には塾生は全員50m泳げるようになる、というのが「塾生皆泳」です。この理念には二つの理由があつて、ひとつはせつかく親からもらった命を溺れてなくしてしまうのは親に申し訳ないから。もうひとつの理由は、50mだけでも泳げれば、溺れている人がいても助けられるから、なので。

SFCのすべての学生に「情報」に強くなつてもらおうとしているのも同じ理由で、情報社会において、学生に最低限自分の身を守つてもら

いたいからというのと、困っている人を見つけたら助けられるくらい力を持つていてもらいたいから、なのです。実際、インターネットが社会に浸透して、これからは情報がとても重要だ、ということは日本全体で言われることになつてきました。その中でも、SFCの卒業生は何かと情報関係のことは頼られるとよく聞きます。SFC出身だというだけで、ウェブサイトつくつてくれな

グは数学ではなく、「情報」の指導範囲となり、「情報」は「情報の科学」と「社会と情報」の二つの科目に分かれました。つまり、プログラミングは数学の一部として扱うことができなくなつたのです。指導要領の範囲内の問題を出す、というのは学校と受験生との信頼関係のためにも重要ですから、プログラミングが数学の一部ではなくなつたのであれば、当然数学の試験ではプログラミングを扱うべきではないですよ。そこで、この変更が適用される二〇一三年に高校に入学する学生たちが入学する直前の二〇一二年十二月に、彼らが大学入試を受ける、二〇一六年より、情報を試験科目として導入することを発表しました。

そうやって「情報」を重視してきたので、中等教育の学習指導要領にプログラミングが加えられてからは、数学の入試の一部にプログラミングを入れてきました。これは、S

——指導要領が改訂されてから、「情報」が導入されるまで

FCは情報の力を持つている子に興味を持つている、というメッセージでもあります。ところが、学習指導要領が二〇一二年にさらに改訂されたのです。改訂では、プログラミン

指導要領が変わると聞いてから僕は慌てて、情報を入試科目として扱っている全国の大学の先生たち、そして高校の情報科の先生たちに話を聞きました。いろいろ相談してい

SFCのメッセージ

る中で、入試でやったらどうか、ともちかけたら、やっぱり入試でやってもらいたい、という意見も多かった。情報の授業って存在はするものの、受験科目じゃないから、高校の教育の中で大事な科目だというふうに認識されていないのです。予備校も生徒も受験科目じゃないから、という理由で情報教育を軽視している。ただ、生徒や学校が「情報」を軽視すると、大学の方も入試に「情報」を導入することをためらうわけです。そうすると結局入試に入らないから学校や生徒が軽視して……というふうに、悪循環の構造ができてしまっているのです。大学が入試を導入すれば、この状況から脱する糸口ができるわけなので、当初はSFCだけじゃなく、他の大学とも連携して、同時に「情報」を入試科目にしようよ、ということをやっています。しかし、結局他の大学はどこも難しい、ということ、まずはSFCが先陣を切って導入してみた、ということ。ただ、こうやって「情報」を受験科目に導入したか、もあつてか、情報教育について議論

する場ができたり、国全体でも情報教育をより重視しようという方針が打ち出されたりしてきたので、既に効果が出はじめているのかなと思います。

——「外国語」を多言語化し、同時に「情報」を導入する意図

インターネットの功績をひとつだけ挙げる、と言われたら、グローバルな空間を築いたことだと思います。これはSFCが掲げている、地球全体の中で、多言語を通じて世界の多様性を理解して生きる、という

理念と合致しますよね。つまり、グローバルで多言語の環境を築いていく、ということとインターネットを広げていく、ということは別のことのように見えて、SFCの中ではひとつの大きな目的なのだと思っています。今回、情報の入試と言語の入試が同時に大きく変わる、ということにはそのようなメッセージも込めています。

村井 純

(むらい・じゅん)

環境情報学部長・教授
専門はコンピュータコミュニケーション、オペレーティングシステム



ようこそ、新任教授

毎年、SFCにはさまざまな分野の教員が着任する。

新たにSFCにやってきたのはどのような教員だろうか。

今号では、政治哲学の理論と応用を教えていらっしゃる宮代康丈准教授と社会学、特にNPO統治を専門とされる宮垣元教授にお話をうかがった。



宮代 康丈

(みやしろ・やすたけ)

総合政策学部准教授

専門は政治哲学、フランス哲学・思想

— 簡単な経歴を教えてください。

学部生の時代は、慶應の文学部で哲学を専攻していました。その中でも私が学んでいたのは倫理学に入るような分野です。特にフランスのエマニュエル・レヴィナスという哲学者の考えに関心を持っていたので、学部生のときはその人について研究していました。しかし、大学院、つまり修士課程に入るときに、少し考えがあつて専攻をフランス文学に移しました。で、特に研究したのはフランソワ・モリヤックという作家のことでした。修士課程修了後は、SFCで非常勤講師をしていたこともあり、政治哲学に強い興味を覚えたのもその時期です。そこで、自分の専攻をもう一度哲学に、その中でも政治哲学に変え、フランス政府の給費生になつて留学しました。そして二〇〇四年から今年の三月までずっとフランスに滞在していました。最初は博士課程の学生として、途中からソルボンヌ大学の哲学科講師、そして訪問研究員として。

— どうして倫理学寄りの哲学から政治哲学へと関心が移つたのですか？

倫理学と政治哲学はだいたい同じような問題を扱います。そして倫理学とか道徳哲学とか呼ばれるものと政治哲学は別々のことをやっていると思われがちですが、物事がどうなつて「いる」のかということより、物事に対して我々は何をす「べきか」というところに関心を持つという点で、共通しているんですね。どっちの領域でも物事をどうする「べきか」を問うわけです。扱う問題は違つても、根底にある考え方は同じです。我々は現在、デモクラシーの社会で暮らしていますが、このデモクラシーというのはどういう考え方に基づいているのかということに、修士課程修了後に関心を持つたんです。特に個人と国家や社会の関係はどうあるべきかということですね。民主主義を実現するにあつて、特に自由主義と共和主義の二つの考え方が有名です。おおまかに言うくと、自由主義は、一番重要なものは個人の権

利だという考え方です。それに対し

て共和主義は、個人よりも「市民」

というものを重視します。どちらも

民主主義なんです。二つの間には

いつも論争があるんですね。この二

つの主義はどういう関係にあるのか

ということに興味があつたんです。

そしてその関係性を調べるにあつ

て、何か特定の観点や哲学者の考え

などの出発点があると分かりやす

い。僕はその出発点に、アレクシ・ド・

トクヴィルという人を選んだんで

す。トクヴィルは、フランスの政治

家であり、歴史家であり、思想家で

あつた人です。彼の考え方について

は、自由主義的だという解釈と共和

主義的だという解釈があります。自

由主義と共和主義というのは対立す

るはずなのに、トクヴィルの考え方

はどちらからも解釈されている。そ

うすると、トクヴィルの考え方を深

く検討すれば、両主義の関係性を明

らかにする一つの切り口になるん

じゃないかと思つたんです。そこで

フランスで腰を据え、彼の著作を徹

底的に検討するという形で、自由主

義と共和主義についての研究をし

ました。

——ご自身の研究会ではどのような

ことをしているのですか？

研究会は、B型を二つ持ってい

ます。一つは政治哲学の理論的な問題

を扱っていて、今年度は「個人と政

治共同体との関係はどうあるべき

か」をテーマにしています。何人か

現代の政治哲学の第一線で活躍して

いる人、あるいは活躍していた人の

文献を取り上げて、輪読をしながら

研究会を進めています。たとえば

ジョン・ロールズや、マイケル・サ

ンデルとかチャールズ・テイラー、

ユルゲン・ハーバーマスという人の

文献を春学期には扱いました。もう

一つの研究会では、実際の社会の中

で見られるような具体的な問題を取

り上げて、理論の応用という形で議

論しています。今年度は堀茂樹総合

政策学部教授の研究会と合同で、

フェミニズムの問題を扱ってい

ます。社会的な男の役割や女の役割な

ど、いわゆるジェンダーの違いが実

社会でどう影響しているのかを考え

ています。

現在の秋学期に限定してというと、

個人と国家のあり方という従来の

テーマを、「連帯」という観点から

研究しています。貧困層や障がい者

などの社会的弱者に対して、国が公

的に社会政策を行うための正当な基

盤は何か、という問題です。具体的

には「リベラルナショナリズム」と

いう考え方を取り上げています。こ

の考えは、個人の権利を守るために

は今のような国民国家が必要だとい

う考えなのです。言い換えると、社

会政策を行うためにこそ国民国家と

いう枠組みが存在するということで

す。そして来年の春には、リベラル

ナショナリズムと対立する立場の

「コスモポリタニズム」を検討する

予定です。この考え方は一つの国民

国家の枠に囚われず、世界レベルで

連帯を考えるものです。ここにも同

じ問題を巡って二つの異なった考え

方があるので、その関係も研究した

いですね。

もう一つの応用政治哲学の方の研

究会では、フェミニズムのテーマは

を変えました。一般的に「ケアの倫

理」と呼ばれる側面からのアプロ

チからテーマを扱っています。従来

人は、個人と個人の関係において、

互いに依存することなく、自立して

いることが重要だというふうに考え

られてきたんです。ですが、本当に

個々人が自立していることが望まし

い人間関係のあり方なのか、という

疑問もある。たとえば、親と子の関

係は自立ということよりは依存、つまり、

親の方が子どもを気にかけ、

ケアする関係であるということが重

要なファクターになつてい

る。僕は

従来、どちらかという

と自立を重視

する立場で考えてきたのですが、も

しかするとそれだと不十分かもしれ

ないと思つてい

るわけです。

——かつて三田キャンパスで学生時

代を送られたわけですよ。その後

SFCに來られて、どんな印象でし

たか？ それから、今度教員として

着任されてどんな印象ですか？

FCは大きく違っていてびつくりしました。とにかく教員と学生との関係が、ほとんど距離がないと言ってもいくらい近くて、教員と一緒に何かをやっている学生の活気に強く印象を受けました。また、SFCでは、教員、研究会あるいは大学それ自身が市民社会に積極的に関わっている。たとえば町の人々と一緒にプロジェクトをしている研究会もあります。そのことには全く反対しないし、むしろ積極的にやってみようと思います。しかし一方で、市民社会で行われているような事柄とまったく同じことを大学がやるべきか、市民社会に役立つことのみを大学の存在理由にすべきかという点は、問われていいと思います。協力関係を築くのはもちろん良いことですが、か

とパリ大学は全然違うけれど、お互いに学ぶべきところは決して少なくないのでないかと思えます。今年久方ぶりに帰国し、SFCに教員として着任してみようと思つたのは、SFCの学生は非常に積極的なことだと思います。研究会で扱っているのは抽象的な事柄なのですが、興味を持つてくれる学生が多かつたので良い意味でびつくりしました。他にも選挙のプロセスや法律の制定、市民の政治意識など、具体的な事柄に関心を持つている学生も多いと思います。そういった人たちには、事実として政治社会がどうなつていくのかという知識だけではなく、政治哲学の観点に立つたときに、どのような規範理論があるのかを知つてほしいと思えます。つまり、実践的な問題と理論的な問題の橋渡しができるような学び方をしてみたいと思えます。一方には最初から政治哲学に関心を持つている人がいるでしょう。他方には現実の政治に興味を持つていない人がいるでしょう。いずれの側からアプローチするにしても、理論と実践は両方必要です、

両方あれば強力だと思います。——SFCの学生に一言お願いします。

FCは大きく違っていてびつくりしました。とにかく教員と学生との関係が、ほとんど距離がないと言ってもいくらい近くて、教員と一緒に何かをやっている学生の活気に強く印象を受けました。また、SFCでは、教員、研究会あるいは大学それ自身が市民社会に積極的に関わっている。たとえば町の人々と一緒にプロジェクトをしている研究会もあります。そのことには全く反対しないし、むしろ積極的にやってみようと思います。しかし一方で、市民社会で行われているような事柄とまったく同じことを大学がやるべきか、市民社会に役立つことのみを大学の存在理由にすべきかという点は、問われていいと思います。協力関係を築くのはもちろん良いことですが、か

とパリ大学は全然違うけれど、お互いに学ぶべきところは決して少なくないのでないかと思えます。今年久方ぶりに帰国し、SFCに教員として着任してみようと思つたのは、SFCの学生は非常に積極的なことだと思います。研究会で扱っているのは抽象的な事柄なのですが、興味を持つてくれる学生が多かつたので良い意味でびつくりしました。他にも選挙のプロセスや法律の制定、市民の政治意識など、具体的な事柄に関心を持つている学生も多いと思います。そういった人たちには、事実として政治社会がどうなつていくのかという知識だけではなく、政治哲学の観点に立つたときに、どのような規範理論があるのかを知つてほしいと思えます。つまり、実践的な問題と理論的な問題の橋渡しができるような学び方をしてみたいと思えます。一方には最初から政治哲学に関心を持つている人がいるでしょう。他方には現実の政治に興味を持つていない人がいるでしょう。いずれの側からアプローチするにしても、理論と実践は両方必要です、

両方あれば強力だと思います。——SFCの学生に一言お願いします。

もっと詳しく知りたい人は



「アナロジーの罫—フランス現代思想批判」

ジャック・ブーヴレス著
宮代康文訳
2003年7月発行
新書館出版



宮垣 元

(みやがき・げん)

総合政策学部教授

専門は社会学、非営利組織論

——先生の経歴を教えてください。

私はSFCの一期生で、環境情報学部出身です。他の選択肢もあつただけど、頭の中で思い描けるような大学生活とは違う、想像もできないような経験がしたかったのでSFCを選んだんです。実際に来てみたら、建物はできてなかつたし、食堂のメニューも毎日カレーだったし、サークルもないし、別の意味で「思い描いていた大学生活」とはかけ離れていました。そんな学生生活の思い出のひとつに仲間と一緒に放送系のサークルをつくったことがあります。オーケストラの演奏の録音や、はじめて開催された七夕祭や秋祭りの司会をしたり、PAをいじらせてもらったり、よろず屋さんみたいでしたね。SFC開設年度に三田祭に作品を出したときには、小さい部屋に多くのSFCの教員・職員の方々が目に来て下さって感激したことを覚えています。

学部の研究会は、江藤淳先生という、文芸評論をなさっていた先生のところでした。漱石論でとくに著名

ですよね。そこで二年間、英訳を含むさまざまなバージンの『源氏物語』や『南総里見八犬伝』、上田敏の詩集や谷崎の『細雪』などを読んできました。卒業論文は、夏目漱石と同じ時代の文学者、徳田秋声について書きました。ドストエフスキー研究などで知られるバフチンの理論をもとに秋声を読んだらどうなるだろうというアイデアは江藤先生の指導によるものです。

卒業する頃には就職先も決まっていたのに、研究がおもしろくなつてしまつて、後先考えず大学院でもつと勉強したいなと思いました。同時に、テキストを離れて、現実の社会を読み解きたいという素朴な欲求が芽生えてしまつて。そんな話を江藤先生にしたら、先生が、やはり当時SFCで教授をしていらした富永健一先生を紹介してくださいました。初対面の際、私の未熟な話をじつと聞いて、必要な勉強や文献をマンツーマンで手ほどきしてくださいましたのは、当時はとても緊張したけれど、今考えれば大変貴重な経験です。こうして、富永先生といろいろとお話しさ

せていただくうちに、自分は広大な社会学の世界の中で、何をどのようにな学んでいけば良いかということが少しずつわかってきました。富永先生は三田の社会学研究科でも教えていらしたので、先生について三田とSFCの間を行ったり来たりしていましたね。また、ちょうどその頃、金子郁容先生（政策・メディア研究科教授）がSFCにいらつしやつて、以前から先生のボランティア論に共感していた私は、金子先生の下でも勉強するようになり、今に至るまで続いています。SFCでは、すぐ身近に素晴らしい先生方が大勢いらつしやつて、そうした環境に身をおけたことは本当に貴重な経験ができたとありがたく思っています。

そんな私ですが、特段研究者になろうと思つていたわけではなかつたので、修士課程が終わつたら就職するつもりでいました。ところが、修士論文を書いていられるうちに研究がどうしてもろくなつちやつてね。向こう見ずにも研究をさらに続けたいと思つてしまつたんです。懲りないですよ。結局、できたばかりの博士課程

に入り、そこではじめて「俺の人生はどうなるんだ？」と気がつくわけですが、これがもう遅い。でも、よくよく考えてみると、一期生の私にとってはロールモデルのような先輩が存在しなかったわけで、良くも悪くも先のことを考えずに決断できた（してしまった）のかもしれない。

博士課程では、とにかく食べていかななくてはならないので、仕事と二足の草鞋状態でした。ライフデザイン研究所（現、第一生命経済研究所）というシンクタンクで、最初はアルバイトから嘱託研究員となり、その後正社員として丸三年勤務しました。加藤寛先生が所長で、公私にわたり指導いただきながら、同時にいろいろな同僚やお客さんから組織人としての多くのことを教わりました。

そして、二〇〇一年に郷里でもある神戸の甲南大学に職を得て、文学部社会学科の専任教員として丸三年を過ごしました。その間、社会学の講義やゼミ、調査プロジェクトなどを行っていました。いい学生に恵まれ、ゼミの卒業生も百五十人ほど

になり、みな広く活躍しています。SFCに来たのはこの春です。

——文芸評論から社会学への転向はどんな感じだったのですか？

二つのテーマは違うけど、研究するという点で一貫性があると思つています。テキストを読むときに勝手に自分の思い込みで解釈するのではなく、何を言いたいのかということに寄り添い、それをきちんと理解するということ。それを少し引いて見たり、場合によっては比較して、自分の言葉で表現するということは、文芸評論を研究していく上で学んだし、文系の研究の基本です。そういう意味では文芸評論も社会学も研究のスタンスは一緒で、文芸評論では素材が架空の世界で、社会学ではそれが実際の社会になっただけだと思います。

——ご自身の研究会では何をなさっているのですか？

来年で阪神・淡路大震災から二十

年なんです。その節目に、「日本のNPOの二十年」と題して、震災後のNPOの振り返りをしようとしています。神戸や兵庫のNPOを取り上げて、彼・彼女らは当時何をしてくいて今は何と闘っているのかということや学生と一緒に考えています。この間の取り組みのフィードバックをしないと、東日本大震災や今後の災害時、あるいはその後の新しい展開に、その経験を活かせないと思うんです。

阪神・淡路大震災は一九九五年です。私から、私が大学院生だった頃起こったわけです。あのときボランティア活動が有名になりましたけど、その活動は慈善活動という言葉だけでは説明しきれないと思つたし、実際はかなり複雑な様相を自分の言葉で説明したいと思いました。また、たとえボランティア活動を「よこしまな」気持ちでやっていても、多少結果が思い通りにならないくても、その活動のプロセスにどのような価値があるのかということはきちんと客観的に言う必要がある。

震災前のボランティアは社会福祉の

イメージが強かったけれど、震災をきっかけに普遍的な行動原理や組織原理へと見方が変わりましたよね。震災後に多くのNPOが立ち上がり、ブームと片付けるにはあまりにも多い人数が動いたので、こんなアクティビティのあり方が社会にあるんだってみんなハッとしたんです。NPOという言葉がまだ一般的でない時代、SFCでその研究をはじめた直後の出来事ですが、あつという間に現実が追い抜いて行くので、研究は常に最先端なものが求められます。ただ、流行ってるからやるのではなく、歴史や理論にきちんと位置づけていくことが重要だと思つています。

話を研究会に戻すと、SFCのゼミではテーマを掲げていますが、甲南大学で教えていた頃のゼミではテーマを掲げず、社会学全般を扱っていました。テーマを掲げないとあれもこれもおもしろくなって節操ないんだけど、些細な日常から現代社会の特徴を見出したり、一見関係ないことが実は同じ構造をもっていることを発見できたりする。社会学

はどんな対象でも知的に幸せを感じられる学問だなと思います。私が学部生の頃、江藤淳研究会で生まれる卒業論文は実はすごく多様で、先生はそれをおもしろいと言っていて喜んでいましたね。また、私もそういうことをおもしろがれる人ではないかと思っています。SFC全体でも、それぞれが関係ないと思われるような研究が、よく話を聞いてみると根底で同じ考え方を持っていたりする。その意味では、研究会同士のコミュニケーションは重要だと思えます。関係ないことをおもしろがれるというのは、実は教養も理解力もかなり必要とされるので結構タフなことだけど、多様な人がいるキャンパスなので、その特徴をぜひ活かしてほしいです。

—— SFCの学生に一言お願いします。

「一期生や二期生の強烈な印象に比べ、最近の学生はだいぶ変わっちゃった」って聞いていたんだけど、私は少しも変わってないと思

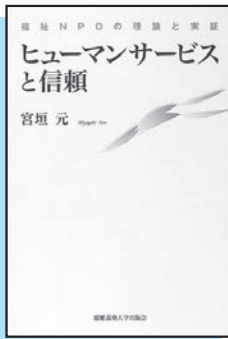
ますね。その世代の特性はいろいろあると思うけれど、ネガティブなことを学生のせいにしてはいけない。今年の春から数ヶ月授業をしてきましたが、今の学生は今の学生なりに一所懸命模索しているし、大きな可能性を感じます。

とにかく、生のものに触れてもらいたいと思います。たとえば音楽を聴きにいつたり、街を歩いてみたり。生のものをちゃんと見て知ることって、忙しいとなかなかできないので、学生のとときにいろいろやってみてほしいと思います。教員と話をしてみるのがそのうちの一つで、オフィスアワーを活用すればいいと思います。私の同期には、当時全教員のオフィスアワーを回ったという強者もいましたよ。

結局、好奇心を持てるかどうかということ。小学生や中学生のころを思い出してみると、だいたいみんないるなことに興味を持った経験があると思うんですよ。それが受験勉強を経て大学生になるにつれ、好奇心の芽が枯れちゃう。これは私が言われた言葉なんだけど、大学生

は枯れてしまった好奇心の芽に再び水をやって育てる時期でもある。肌でじかに触れて、感じ取っていくことをしていかないと、みずみずしい好奇心の芽は出ないんじゃないかな。

もっと詳しく知りたい人は



「ヒューマンサービスと信頼
—福祉NPOの理論と実証」

宮垣元著
2003年11月発行
慶應義塾大学出版会出版

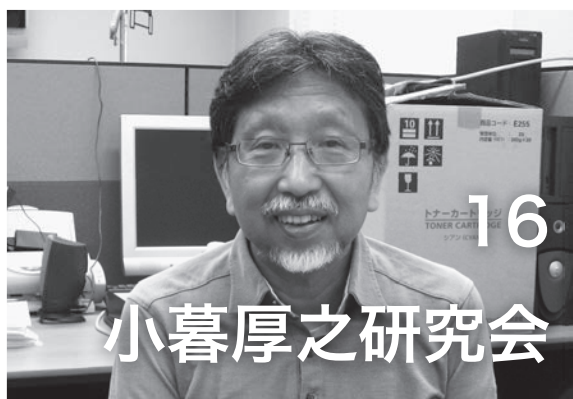


「コミュニティ科学
—技術と社会のイノベーション」

金子郁容・玉村雅敏・宮垣元著
2009年11月発行
勁草書房出版

おとなりの研究会

さまざまな分野の学問が学べるSFCにおいて、研究会（ゼミ）はカリキュラムの中心だ。学生は授業で幅広く諸学問に触れ、そして研究会でそれを掘り下げる。当然、学生にとって研究会選びは自分の方向性の選択に他ならず、非常に重要だ。このコーナーでは、数多いSFCの研究会のうちから二つを取り上げ、各担当教員にどんな狙いを持って研究会を運営しているのかを聞いた。



小暮厚之研究会

小暮 厚之

(こぐれ・あつゆき)

総合政策学部教授

専門は統計学、リスク理論、計量ファイナンス

——研究会のテーマについて教えてください。

研究会（ゼミ）は二つ持っていて、両方とも統計学を扱いますが、一つは基礎的なもの、もう一つは専門的なものと分けています。

この秋学期の基礎の方の研究会では、GLM（一般化線形モデル）という、回帰分析の拡張版のようなことをやっています。もう一つの方では統計的機械学習を用いて、ビッグデータを処理の対象としています。今年の春学期は、基礎の研究会の方におよそ二十五名、専門の方に約十名が集まりました。

——研究会では具体的にどんな活動でしょうか。

どちらの研究会も理論的な面に重点を置いて進めています。通常、統計データを分析するときには回帰モデルなどの統計モデルを使います。ではどういふときにどういふモデルが有用なのか、それを考えるのが理

論です。データ分析では正しいモデルというのではありません。有用なモデルがあるだけです。そのようなことを理解するには理論を避けて通れません。授業ではそこまでの話で

きません。普段の授業では手法とソフトを使った実践的な分析をやっている、理論についてはほとんど話しません。しかし、統計的なリテラシーを培うためには理論的なことも重要です。理論を学ぶことが応用の可能性を広げるんですね。

SFCにはいろんな人がいて多様なニーズがありますから、まずは実際にデータを分析できるようにすることが大切です。授業では理論的なことを話すことはあまりありません。研究会は理論的なことに興味がある人、数学を活かしたいという人たち向けに開講しています。

——レクチャーがメインなのですか？

専門を扱う方の研究会では本を輪読したり、私がレクチャーをしたり

しています。あえて少し難しいレベルの本を選んでいきます。学部の上級生や大学院の一年生が扱うようなレベルの本です。

基礎の方の研究会でも輪読をしますが、基本的にはデータ分析を勉強したことがある人であれば理解できるようなレベルのトピックを扱っています。統計学は基本的な理論に限って言えば、そこまで学ぶ内容が多くないので、大体扱うトピックは同じで、回帰分析に関連するものが多いです。今年度は「頻度論とベイズ主義」というサブタイトルをつけて、伝統的な統計学だけではなくベイズのような少し目新しい統計学も扱っています。

——先生の研究会の学生は卒業論文でどういうテーマを扱いますか。

私は特に細かいテーマは指示しませんが、統計学を必ず使うように言います。ただ傾向としてはファイナンスや保険に関する統計分析が多いです。

自分でテーマを見つけて、それに対する自分なりの答えを見つけ、自分なりにまとめるというプロセスですごく大事ですよ。レポートをまとめることの意味はそのプロセスを体験することにあつて、卒業論文はその集大成だと思っています。それぞれ自分が興味のあるテーマを持っていると思うので、それをテーマにするのが一番だと思っています。

——経済学部の授業とはどのように違いますか。

経済学部のゼミでは、メンバー全員が経済学の知識を持つていることを前提にしているでしょう。一方私の研究会には、経済だけでなく、IT、脳科学、バイオ、建築、政治、イスラムなど、いろんな専門の人がいます。いずれもデータ分析を利用する点で統計学が共通しています。それ以外は共通点がほとんどありません。その点が経済学部とはずいぶん違うと思いますね。でも、脳科学にも興味を持っている人が経済

学に興味を持っていないかということ、そうではないんですよ。SFCのおもしろいところは、たとえば現在脳科学の研究会にいますが、以前は経済学の研究会にいたという人がいますし、その逆もいます。脳科学の手法と経済学の手法というのはデータ分析でとても共通している部分があります。統計学という学問自体が分野の壁を越えて使われているんです。

——学生に一言お願いします。

数学は小学校から高校までみんな学んできていると思うので、それを何らかの形で活かしてほしいと思います。数学というと自然科学のイメージがありますが、社会でも数学は使われています。たとえば、金融機関のリスク管理や将来私たちが受ける年金の計算に使われているわけですよ。そうやって世の中の実際の場面で活用されている数学のあり方を勉強するのはすごくおもしろいし、役に立ちますよ。最近では

ビッグデータという言葉に象徴されるように社会のあらゆる側面でデータの利用が盛んになってきました。統計学も機械学習のような新しい方向に向かっています。数学が得意でなくても、これまでやってきた数学を活かしたいと思っている人がいたら、ぜひ統計学を学んでほしいなと思います。



添田 英津子

(そえだ・えつこ)

添田英津子研究会

看護医療学部専任講師

専門は小児看護学、移植看護、移植コーディネーション

—先生の研究会のテーマはどのようなものですか。

私はもともと小児外科の看護師をしていました。そのときに移植を受けられれば助かるはずの子どもたちを見ていたのがきっかけで、移植に興味を持ち、移植コーディネーターを目指すようになりました。通常の医療現場は患者と医療者の二極構造です。ところが、移植医療の場合は、ドナー(提供者)とレシピエント(移植患者)と医療者の三極構造になっています。そのような三極構造の中で調整するのが、私のような移植のコーディネーターです。この私の経緯から、研究会のテーマは「小児看護」と「移植」です。

まずは、「移植」について、さまざまなことを頭の中でぐるぐる考えること」をしてほしいので、慶應病院で毎週行われている肝臓移植のカンファレンス(会議)に参加したり、学生たちと移植や小児関連学会へ参加することからはじめます。

日本では主に生体間移植(生きている人の臓器を移植すること)を

行っていますが、生体間移植を行うためにはさまざまな検査や条件をクリアしなければなりません。

移植を受けたい気持ちはあるのだけれども、「人の臓器をいただいても、生きたくない」「あきらめよう。あきらめよう」と自分に言い聞かせている方もおられます。逆に、提供したい気持ちはあるのだけど、とても不安であったり、臓器がレシピエントの身体に合わなくて提供できなかつたりする方もいるんです。また、医学的にドナーになれるとなっても、いざドナーになると思うと些細なことでも心配になります。

たとえば、工事現場で働くような方は、手術後も重いものが持ち上げられるか、もともと腰痛がある場合は、手術の後にその腰痛が悪化しないだろうか、疲れやすくなったりしないだろうか、などです。肝臓移植カンファレンスでは、医学的なことから社会的なことまでさまざまなことが議論されます。研究会の学生は、春には、カンファレンスで話し合っている内容を理解するのが難しいのですが、夏頃には医学的な内容か

らドナーとレシピエントの葛藤まで大抵のことは分かるようになります。

現在、慶應では子宮移植にも取り組んでいます。子宮移植は、子宮が原因の不妊症の女性が子どもを授かることができるかもしれないという移植医療です。救命を目的とした移植医療とは意味が違います。患者にとって新しい選択肢ができることで、悩んだり傷ついたりする方がいるかもしれない。かつて、ある患者が、「移植っていう選択肢がなければよかった」とぼろりとこぼしたことがありました。私たちは「患者さんの為に」っていう気持ちで一所懸命にやっているのですけれど、そういうお気持ちもあつたのですね。そう考えると、「子宮移植」という言葉そのものを社会に発信してもいいのか、ということには慎重にならないければなりません。一方で、海外では子宮移植がはじまっています。「待った!」ができない現状があります。研究会ではそういった議論もしています。

さまざまな議論を通じて、私は学

生たちに、頭の中で移植のことをぐるぐる考えてほしいと思っっているんですよ。ぐるぐると考えながら、最先端の新しい取り組みの中で、自分たちの立ち位置を見つけてもらいたい。このことは、最先端の医療分野だけではなく、在宅医療や高齢者医療の分野にも当てはまることだと思っっています。

——研究会を進めていく上で、先生のモットーはありますか。

まずは、研究会のメンバー全員が仲良くすることです。相手のことを考えることは三極構造にある移植の原点であり、看護の原点です。上辺だけではなく、お互いのことを心から信頼できるチームになることがモットーです。

あとは、移植の医師・薬剤師・看護師も学生を快く迎えてくださいます。学生には、謙虚さを忘れずに「ありがとうございます」って言って可愛がってもらいなさいって。それがモットーかな(笑)。でも、それは

学生の態度としてすごく大事だと思います。

——受験生や学生にメッセージをお願いします。

私は、消毒液のアルコールの匂いが好きだったから看護師を志しました。また、看護師の点滴を見る姿に憧れていました。なんて稚拙な動機なのでしょう。でも、動機はどれであれ、人の命と触れあうって、すごいことだなんて思っています。ただ、特に日本の場合、看護師はとにかく忙しい。一方で、私がアメリカで看護師として働いていたとき、アメリカの看護師は体温も血圧も測らないし、身体も拭かないし、体位変換もしていなかったのです。そこで、アメリカの看護師に何をしているのか聞いたら、「看護してる」と言うのです。アメリカの看護師は医者と同じように身体に何の異常が起きているかを観て、患者さんの話をたっぷりと時間をかけて聞いて、司令塔のように動いています。身体を

拭くことや、体位変換などはすべて他の職種が行っています。日本の「看護」とアメリカの「看護」の実践は少し異なります。海外研修の機会もありますので、そのような違いを見るのもおもしろいです。とは言っても、私が日本に帰ってきたのは、看護として身体を拭いたりするのがおもしろいなと思っただけからです。自分が老いたとき、そういう看護師さんを見てもらいたいですしね(笑)。今の学生たちを見てみると、海外志向の学生たちが多いですね。日本の看護をじっくりと勉強した上で、アメリカのプラクティカルな看護を見て、自分なりの「看護」を実践してくれたらいいと思います。



sfcism

vol.05

SFCの卒業生や現役の学生のなかには、知る人ぞ知る人がいる。

このコーナーでは、ユニークな活動をしている卒業生や学生を特集する。

今回は、株式会社 NOZY 珈琲の代表取締役である能城政隆さんにお話をうかがった。



能城 政隆

(のうじょう・まさたか)

環境情報学部 2009 年度卒業生
株式会社 NOZY 珈琲 代表取締役

——能城さんの経歴を教えてください。

僕は高校は千葉の木更津の方にある高校に通っていました。大学から SFC の環境情報学部に入學して、四年間通い、卒業した二〇一〇年の五月に株式会社 NOZY 珈琲を創業しました。同年の八月から三宿に店舗をオープンし、以来コーヒーを提供してきました。昨年からは原宿のキャットストリートにも THE ROASTERY とごう新店舗をオープンしました。

——どのような経緯で会社を創業されたのでしょうか。

もともと、高校時代は野球に打ち込んでいたんですが、大学では何か違うことをしようかと思って、入学してからはしばらくの間は新しく打ち込めるものを探していたんです。当時は将来どんなことをしたいかも分からなかったし、大学生のうちになにかやるとしたら何か将来につながる方がいいなと思って模索していました。SFCでの生活は刺激的だったんですが、結局これと言ったものは何も見つからないまま、二年生になってしまい、とりあえずアルバイトでもしようと思って、スターバックスでアルバイトをはじめたん

です。そのアルバイトがきっかけでカフェやコーヒーに興味を持つようになり、お客さんにどのように伝えたら喜んでもらえるか、みんなどのようにしてコーヒーを楽しんでいるのか、また、僕自身にとってコーヒーがどのような意味を持っているのか、ということを中心に考えるようになりまし。

コーヒーに興味を持ったもう一つのきっかけは、コーヒーが抱えているさまざまな社会的な要素です。SFCは問題発見解決型学習を行っていると言いますが、その点コーヒーは世界中で飲まれているし、特に当時はフェアトレードやトレーサビリティなどの生産地での貧困問題が社会的に注目を浴びていて、さまざまな問題を持っているように思えたんです。そこで、三年生の春学期には山本純一先生(環境情報学部教授)のもとでフェアトレードの研究をしました。山本研究会では一人一地域を担当するので、僕はコーヒーの発祥地であるエチオピアにフォーカスして、現地でコーヒーがどのように生産されているか、実際にフェアトレードが生産者を救えるのだろうか、といったことを研究していました。

ちょうど山本研究会にいたころ、「アントレプレナー概論」という授業を受講したことがきっかけで、自

分が今調べているコーヒーが抱えるさまざまな問題を起業とうまく組み合わせられないかなと思うようになりました。特に自分が問題意識を感じていた、消費国側でのコーヒー文化を変えるようなことが何かできないかと思いました。ただ、当時は三十歳になってから起業しようと思っていたんです。卒業してすぐ起業するのではなく、一旦社会に出て、既存の会社に入り、貯金がたまったらある程度自分でもやっていけそうだなと思ったら起業しよう、と。だから、四年生になってからは普通に就職活動をして、何社からか内定もいただき、ちょうどその中に起業を支援するような会社があったので、そこへ就職するつもりだったんです。

僕は「予見の打破」という言葉が好きなんです。就職活動が一通り落ち着いたところで、別に大学生でも自分のお店をやってみてもいいんじゃないかと思うようになりました。というのも、三十歳や四十歳になつてから脱サラして、自己資産と融資で新しいビジネスをはじめると、ものすごくリスクが高い。三十歳にもなると、妻や子どもがいるかもしれないし、そうすると自分が養わなければならぬ人たちがいる中で収入を一旦断つわけですよね。そう考えると、大学四年生で、就職先も決まっている人がお店を新しく開

業するのは全くリスクがないように思えたんです。たとえお店が大失敗して百万円の借金を負ったとしても、これから働く会社でその分稼げばいいわけです。そう考えると、むしろ百万円くらいかけて何かに挑戦することで得られる学びの方が大きいなと思って、四年生の春学期からいから自分の店を開く準備をはじめたんです。

一方で、夏休みには内定先のインターンがあり、そちらにも参加しました。会社のオーナーの別荘がハワイにあるんですが、そちらで三週間泊まり込みのインターンがあったんです。ところが、最初の一週間で過ごしたくらいとは違うな、と感思ってしまったんです。何事も違和感を感じたらすぐに切り捨てちゃう性格なので、一週間終わった段階でオーナーに、辞めますって伝えました。ただ、当然帰りの飛行機なんて確保してはなかったし、オーナーの別荘は山の上でタクシーもバスも一切来ない場所だったので、とりあえずキャリーバッグを引いて、町の方までヒッチハイクして戻りました。四年生からは飯盛義徳先生(総合政策学部教授)の研究会に入っていたんですが、インターン期間中に就職を辞退するなんて前代未聞だったようで、史上最速で会社を辞めたやつだ、

なんて言われました(笑)。再度就活をしてみたんですが、面接の場で僕があまりにも将来自分で作ろうと思っている店の話やコーヒーの話をするから、面接官の人に、今さっさと起業した方がいいよ、と勧められ、就職するのはやめました。

秋学期には計画していた通り、湘南台の居酒屋の店を午前中だけ借りて、コーヒーを淹れていました。ただ、あくまでも居酒屋を借りての営業だったので、できることに限界があったし、当時から自分がコーヒーを提供する空間へのこだわりがあったので、卒業後は間借りではなく、三宿で自分の店を開業しました。

——学生へのメッセージをお願いします。

SFCって本当に刺激的なところで、SFCでの四年間は僕にとって冒険みたいな感じでした。かつての僕のように、自分が将来やりたいことが長い間分からぬケースも多しと思えますが、一日一日を大切に過ごしていると、何かが見えてくることもあると思います。

When I was young

学生にとって、教員はどこか遠い存在である。
しかし、そんな教員にも学生だった時代がある。一体どのような学生生活を送り、
それは、その後の人生にどのような影響を与えたのだろうか。
今回は、総合政策学部の野村亨教授に若かりし頃を振り返ってもらった。



軽井沢にて

野村 亨

——先生の経歴を教えてください。

僕はもともと慶應の三田キャンパスから少し歩いたところにある、芝浦というところに住んでいました。幼稚園は家の近くの増上寺に付属していたところに通っていたんですが、小学校からはもつと勉強に力を入れていこうという親の考えで、浜松町の方にある公立の小学校に越境入学しました。実際、その小学校は当時としては進学熱があつて、私立の中学校を受験する子が多かったです。僕もその一人で、中学受験をして、青山学院の中等部に入りました。その後、大学院まで青山学院にずっといました。

僕はもともと下町出身だったし、幼稚園がお寺の付属だったこともあつて、キリスト教の青山学院は最初のうちは異国みたいな感じがしました。毎日学校の教会で礼拝があつて、英語教育も盛んで、留学しているような気分がしたんです。ただ、英語は好きで、よく勉強しました。

僕は中学の頃からスポーツが得意ではなかったのですが、一年生のときは生け花のクラブに、二年生からは茶

道のクラブに入りました。すごくからかわれましたけれど、純粹に生け花や茶道が好きだったんです。そのまま内部進学で青学の高等部に進んだからは、歴史研究会に入りました。長期休暇中にみんなで奈良や京都へ合宿をしに行きましたね。

僕が高校一年生くらいのとき、両親が家のそばにあるお寺の住職さんと親しくしていて、僕も出入りしていたんです。当時、そこのお寺には三十代のインド人がいて、日本の仏教を学びに来た、ということで駒澤大学に籍をおいてそこのお寺に居候していたんですね。ただ、実際はヒッピーのような感じで、勉強せざるにぶらぶらしていたんです。ところが、お寺のお坊さんたちは誰も英語ができなくて、彼とコミュニケーションがとれなかった。住職さんは僕が青学で英語を勉強していることを知っていたから、僕がそのインド人の話し相手になつてくれないかと両親に相談してきたんです。僕は英語は好きだったし、その人のインドの話はおもしろかったから、快諾して毎日のお寺に行き、そのインド人と英語で話すようになりま

した。

さらに、お寺とは逆の方向に日系二世の方の家があつたんです。ご主人も奥さんも見た目は完全に日本人なんだけれど、アメリカ生まれで、国籍はアメリカ。お子さんも二人いて、みんな日本語喋れるんだけど、やつぱりなんとなく普通の日本人とは違う感じがして、近所の人たちはあまり親しくしていなかった。その人はアメリカで育つたものの、戦争がはじまる前に日本の外交官としてリクルートされて、戦争中は満州や中国の領事館に行っていたらしく、当時の貴重な体験を英語で話してくれるわけです。これがまた当時の僕にはとてもおもしろくて、ご主人も話し好きだったから、僕は毎日のようにその家にお邪魔して、夜遅くまでその話を聞いていました。あまりに遅くまでいるものだから、早く帰つてきなさいって両親に怒られたこともありましたね。インド人の話も、元外交官の人の話も、最初のうちは全部聞き取ることができていなかったと思うんだけど、三年間もやると、ずいぶん英語がうまくなつて、自慢じゃないけれど大学に入る

ときには英語でプレゼンテーションする、なんてことは楽にできるようになっていました。

英語以外にも、青学は高校二年生のときに選択科目としてフランス語とドイツ語が選べたんです。大学受験をする人は英語をもつと勉強するんですが、僕は大学も青学に行くつもりだったのでフランス語の授業をとつて、そうしたら英語だけじゃなくて、フランス語も好きになっちゃったんです(笑)。それに留まらず、受験をしなくていいぶん余つた時間を遊びに使つてしまつてはもつたいないと思つて、フランス語に加え、学外で中国語も学びはじめました。当時の中国はまだ文化大革命の時代で、日本と国交もなく、中国語なんて勉強したら、「共産党か!」と言われるような時代です。そこで、神田の湯島聖堂で開講されている、斯文会という中国語や中国の古典を学べるところを父親が探してきてくれて、そこで中国語を学びはじめました。

大学ではインド哲学や仏教哲学を勉強したいと思ひ、最初のうちは外部受験も考えてはいたんです。うち

はもともと仏教徒でしたが、学校はクリスチャンで、キリスト教の教えが毎日耳に入ってくるわけです。そうしていると、キリスト教のことがいろいろ分かって、キリスト教の魅力も感じるものの、逆にアジア人としての自覚が目覚めてしまつて、仏教やアジアのことをもつと知りたくなと思うようになったんです。僕が高校生のうちはそのうちのものを学べる場所は青学にはなかったのですが、卒業するタイミングになつて、青学に史学科ができること、そしてそこに東洋史の先生も来るということを知り、東洋史なら近いと思つて、結局青学に内部進学しました。

大学に入つてみると、学ぶのは東洋史ですから、当然中国語を使うわけですが、自分ももともと中国語を勉強していたし、大学の勉強はともも楽しんでたね。むしろ物足りなかつた(笑)。そこで、アテネ・フランセっていうフランス語の学校や慶應の外国語教育研究センター(慶應外語)にも通いはじめました。慶應外語では最初はベトナム語を学んでいたんですが、あんまり合わなくて、途中からインドネシア語に変えました。

インドネシア語を学んだのはそれが初めてです。その間も相変わらず斯文会で中国語を学んでいました。その後、さらにいろんな言語に手を出して、駒澤大学でサンスクリット語を学んだり、当時東大にいらつしやつた永積昭先生という東洋史の先生がオランダ語で教えていらつしやつた東洋史の授業をとつて、オランダ語を勉強したりしていましたね。特に僕が大学の一年生や二年生だった頃は大学紛争の一番最後のときで、大学はほとんど授業がなかったからそういうことをいろいろしていました。修士課程に進学してからも、いろんな学校に行つて、いろんな言語を勉強していました。

卒業後は日本貿易振興機構(JETRO)に就職しました。コンピュータを使って貿易統計の処理をやつていたんですが、当時のコンピュータは大きな会議室ひとつ分くらいのもので、会社に一台しかありませんでした。コンピュータが入っている部屋は温度管理のために年中冷房が入つていて、大蔵省から大きな磁気テープを持ってきては、そこにあるデータをパンチカードを使つて操作していたんです。作業自体は難しくはなかったんですが、一年くらいその仕事をしていたら、身体が冷えて、腎臓病になつて、すごく疲れやすくなつてしまつた。それで、さすがにこれはずつとは続けられないなと思つて、母校の青学の高等部の教諭のポストがちょうど空いたので、そちらに移りました。

青学では司書教諭と社会科の教諭を兼務していたんですが、JETROのときに患つた病がだんだんよくなつてくると、今度はずつとこうやつて本をいじつたり、高校生に教えたりし続けて人生が終わるのかなと思つて、虚しくなつてきてしまつた。当時は個人的に学外の学会に出ているんですが、そこでのつながりもあつて、大阪の関西外国語大学にうちで働かないかって誘われたんです。ちょうど自分のやつていることが虚しくなつてきたときだったし、関西外国語大学に籍を移して、十年ほど中国語や英語、アジア研究のよいうなことを教えました。途中、許可をもらつてマレーシアの国立マラヤ大学つていうところに二年間ほど自費で留学をしたんですが、その留学

——関西外国語大学時代になぜマレーシアに留学されたんですか。

僕ももともとインド哲学を学びたかつたんですが、一方で中国にも興味があつた。東南アジアという地域は特殊な場所、インドと中国の両方の文化が混じつている。しかも、東南アジアは欧米の植民地だったこともあつて、現地の言葉だけではなく、欧米の言語もできないと研究ができない。たとえば、インドネシアの歴史をやるうと思つたら、英語はともかく、オランダ語、インドネシア語ができる必要があるし、もし古い時代のことを知ろうと思つたら、サンスクリット語も必要になつてくる。いろんな言語を学ぶのが嫌いな人には大変かもしれないけれど、僕

When I was young

にはそれが逆に楽しかったから、東南アジアを研究するようになったんです。僕は大学の学部時代はインドネシアのことを研究していたんですが、オランダ語の力がないので、自分では力不足だなと思って、大学院からはマレーシアに研究対象を変更しました。マレーシアであれば、マレー語、英語、中国語ができればいい。マレー語はインドネシア語に非常に似ているし、他の言語は僕は得意だったから、大学院からはマレーシアを研究対象にしていたし、SFCも来た当初はマレー語を教えていました。

——学生に一言お願いします。

あんまり自分で自分を限定しない方がいいと思います。もちろん自分がやれることって限られているかもしれないけれど、最初から自分ほんなもんだって思っただけじゃあ、よくないと思う。慶應や早稲田、東大に来ているような学生の場合、大学に入ることが目的になっちゃっている人がときどきいますよね。入った後に何をやるべきか、本当は

そっちが中心になつていなければいけないのに、自分は一流大学に入ってからこれでいいやつて考えている。今の時代、一流大学を卒業すれば、いい会社に入れて、一生安泰だみたいな人はほとんどいないですよね。社会に出てから、山もあれば谷もある。だから、慶應に入ったことで自己満足しちゃつてもうこれいいやつというような発想は持たずに、もつと自分の可能性を追求すべきだと思います。

もう一つは、やはりよく言われることだけれど、大学生のうちに外国をいろいろと見てもらいたい、ということなんです。特に、バックパック旅行をすべきだと思います。危ないことをしてもらいたいとか、危険地帯に行ってもらいたい、ということではなくて、自分で自分をマネージして、危機管理をする、ということとを体験してもらいたいんです。たとえば、やたらに人を信用しない、ということもそのひとつです。僕这个时代には沢木耕太郎の『深夜特急』という本が非常に流行ったんです。友達と話していて、ひよんなことからヨーロッパに行くことになり、飛

行機で香港へ渡つて、マカオのカジノでお金をすつて、それからバンコクへ行つて、マレー半島、インドを経て、カトマンドゥからバスに乗ってロンドンを目指して、トルコの方まで抜けていったつていう筆者が体験したバックパック旅行をもとにした紀行小説です。その体験に触発されて、日本でも一時期バックパック旅行が非常に流行ったんですね。当時は行きたくても行けない人も多かったですし、今よりも随分危険なことが多かったけれど、今は簡単に世界中どこでも行ける。今の学生は何かと理由をつけて海外に行きたがらない人が多いけれど、時間がある学生のうちにこそ、外国に出ていって、見聞を広げてもらいたいと思いますね。



野村 亨

(のむら・とおる)

総合政策学部教授

専門は東南アジア史、鉄道史

28: The neighbor laboratory

In SFC, a place where everyone can study freely about all kinds of things, seminar is the core of the curriculum. Students learn the wide world of academics through each class, and deepen them in the individual seminars that each professor has. Of course, choosing which seminar to join is an important and difficult decision that one has to make. In this volume, we interviewed Assistant Professor Etsuko SOEDA and Professor Atsuyuki KOGURE about their seminars.

Assistant Professor Etsuko SOEDA is a transplant coordinator, and teaches about the process and difficulties of transplantation to students, by taking them to the actual conferences that she attends. She also talks about the difficulty of introducing new medical methods to patients and how the students must think about the different aspects that is required for nurses.

In the seminar, Professor Atsuyuki KOGURE teaches the theories of statistics. In the ordinary classes, he teaches how to use statistics, but in order to understand and use statistics further, learning the theories of statistics is inevitable. So students who learned how to use statistics through the class come to Professor KOGURE's seminar to learn the theories of statistics in depth.

32: sfcism

Some graduates and students are well known to few, for their unique activities. In this volume of KEIO SFC REVIEW, we interviewed Mr. Masataka NOJO, founder and CEO of NOZY COFFEE, a coffee shop that is located in Mishuku, a quiet town in Tokyo. Through the interview, he describes about his student life in SFC, and how the events he experienced during those years had led him to start his original coffee shop.

34: When I was young

To students, a faculty is a target for respect, and somehow distant. But even they had a time when they were young students. How did their student life effect their life after graduation, and how did they choose to become a faculty of SFC?

We interviewed Professor Toru NOMURA, an expert of history and languages of Southeast Asia, about how he had spent his youth, and how he started his research on Southeast Asia. He explained how his younger self was gifted with an environment with English speakers around, and how he loved learning different languages.

38: Abstract SFC REVIEW 56

40: From Editor

Abstract SFC REVIEW

Table of Contents

56

02: The Bearers of SFC

Since the establishment, SFC has a culture of self-governance by students. Because of this culture, some students collaborate with the campus officials and plan ways to promote the campus, maintain facilities, run campus festivals, and much more. What are the motivation of these groups of students, and how did their activity start? We asked seven student organizations about their activities, and how they feel about their activities. In addition to the seven interviews, we hosted a talk with two other organizations in SFC that publishes and delivers information about the campus, just like KEIO SFC REVIEW. We discussed about how each of us have a different approach, and how we think about each other, and what could be done to improve the life of other students in SFC.

16: Message from SFC

The world is constantly changing, and as the world changes, so should the universities, and SFC is always looking forward to make that first change happen. Following this school spirit, SFC has decided to change its entrance exams from 2016 by adding "Information" to the exam subject and also allowing examinees to take parts of the "Foreign language" exam in German and French. How was this change decided, and how will it effect SFC? We asked Professor Jun MURAI about the new "Information" exam and Professor Takahiro KUNIEDA about the change in "Foreign language" exam. Professor KUNIEDA explains about the importance of having a diversity in background of students, and Professor MURAI describes how it is important and meaningful to change both exams at the same time.

22: New Comers

SFC is always interested in finding new areas of study, and the lineup of faculties are constantly changing, and new faculties are introduced to the campus every year and term. In this volume, we would like to introduce Associate Professor Yasutake MIYASHIRO and Professor Gen MIYAGAKI.

Associate Professor Yasutake MIYASHIRO received his MA in the department of French literature on the Mita campus, before completing his Ph.D. in political philosophy at the Sorbonne in France. He briefly explains what political philosophy is and the importance of its application to concrete problems of society.

Professor Gen MIYAGAKI is one of the first graduates of SFC. He gently describes how he changed his profession from literature to sociology. Also, when comparing SFC of today with that of 20 years ago, he said students have not lost their enthusiasm nor their desire to learn.

KEIO SFC REVIEW

56

発行人

奥田 敦 (湘南藤沢学会会長)

編集長

藤吉 賢 (環境情報学部 4年)

副編集長

佐藤 響子 (環境情報学部 2年)

編集スタッフ

武藤 真理子 (環境情報学部 3年)

林田 早紀子 (環境情報学部 2年)

中村 幸嗣 (総合政策学部 2年)

坂本 美佳 (看護医療学部 1年)

湘南藤沢学会

KEIO SFC REVIEW 担当幹事

堀 茂樹 (総合政策学部教授)

事務局

田坂 真美

From Editor

SFC生はよく「SFCを卒業してどういう仕事をするの?」ということを探ねられます。学びがひとつの分野に限定されていないため、社会的な応用が分かりにくいことが主な理由だと思います。もちろん、「卒業後の進学先」という資料が公表されているので、そちらを見れば、実際にどこに行っているのか、ということは分かります。ただ、それとは別に、僕は個人的に「SFC生は編集やファシリテーションに長けているのではないか」と思っています。

僕たちはKEIO SFC REVIEWを企画する際に、一号ごとの内容のバランス、過去の号と比較したときの内容のバランスなどを考慮しています。また、さまざまな記事をとおしてSFCの内部でのコミュニケーションにも、SFCとSFCの外とのコミュニケーションにも、円滑化をもたらそうと努めています。こうした編集やファシリテーションは、自分自身で今学ぶべきだと思うことを正しく理解し、そのための方法を構築していく、というSFCの学び方と酷似しています。

しかし、「編集」や「ファシリテーション」は紙面上や会話で終わってしまうものです。これまでのSFCから生まれてきた実践や試みが画面や紙面上のものが多かったことにも、そういった背景があるのではないかと思います。社会に一層のインパクトを与えるために、またこれまでSFCが画面や紙面上でつくりあげてきた世界を一層拡張していくためにも、一年あまり前に52号で取り上げたような、ものづくりの試みはデザインや建築といった分野だけではなく、より広くSFCに浸透していくべきであると、僕は思っています。

編集長の僕自身がものづくりの研究会に所属しているため、ここではものづくりのことを取り上げましたが、SFCには他にも未来を見据えた、数多くの施設や設備が存在します。ただ既存のものを組み合わせるだけではなく、それが未来においてどのような意味を持つのかを踏まえた編集をしていくことが、SFC生にはこれまでも求められてきたし、今後もそれが重要なのではないかと感じています。今後もREVIEWがSFCに存在するさまざまな要素を組み合わせる一助になればよいと思います。

56号編集長 藤吉 賢 (ふじよし・けん)

発行日

2014年11月15日

発行所

慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322

0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

gakkai@sfc.keio.ac.jp

製作・印刷

株式会社ワキブプリントピア

〒252-0815 神奈川県藤沢市石川 6-26-19

0466-87-5811

<http://www.printpia.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。
最新号およびバックナンバーをご希望の方は湘南藤沢学会までご連絡ください。

KEIO SFC REVIEW は
学生編集スタッフを募集しています。

興味のある方は、keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp
までご連絡ください。

募集中



KEIO SFC REVIEW

ISSN 1343-3318

